

第八章 創業の元勳

一 三次半七と沢井秀造

明治七年に刊行された「丸屋商社之記」には、社員姓名録が付載されている。それによると明治二年一月一日に入社しているのは、早矢仕有的のほかに、三次半七、沢井秀造、大塚熊吉の三人である。すなわちこの三人は、丸善創業の際の第一の元勳であるといわなければならない。社長有と合せてこれを丸善の四人衆と呼ぶ。



三次半七

三次半七は江戸の深川の出身で、天保三年（一八三二年）に生れた。有的よりも五歳の年長である。もと煮豆などを商なっていたという。あるいは薬種商の手代であったともいう。後に岩村藩の内田（喜十郎）という武士の若党となった。内田が京都に赴く時にその伴をしたが、内田は途中で病氣のために江戸へ引返した。この時に品川宿でこれを出迎えたのが早矢仕有的であった。応待に出た半七がすこぶる明快に病状を述べたので、有的は大いにその才を認めた。有的が丸屋を開業するに当って、これを迎えたのは、そのためであったと伝えられている。

半七は横浜では店番も台所も内外一切を司どったが、釘店に島屋の店が開かれると、半七はここに勤務することとなり、ついで通三丁目に丸屋善七名義の書店が設けられると、その主任に任ぜられた。また薬店が開設されると、その支配人を兼任した。彼は明治十九年三月二十三日に歿したために、その功を充分に顕わすには至らなかったが、半七の子の半之助、半之助の子健太郎は引続いて丸善に勤務し、半之助は会計に従事し、健太郎は取締役を経て監査役となった。

沢井秀造は岩村藩の家老沢井市郎兵衛の子である。市郎兵衛は主家の継承問題の時に、松平乗命のりもちの相続について功があり、安政年間からは江戸詰となってこれに仕えた。乗命は早くから洋学に志があって、藩士を江川塾に学ばせたこともある。当時では有数の進歩主義者であった。秀造は弘化元年（一八四四年）に生れたから、早矢仕有的よりは七歳の弟である。もとの名をはじめといった。父の傾向を受けて洋学を好み、安政三年（一八五六年）に江戸に出て、佐倉藩士 藤田倉二について、洋学・製図・化学を学び、更に坪井信道について医学を、江川太郎左衛門について洋式兵学を学び、新進の知識人であった。

当時美濃の多治見に陶器を商う西浦屋吉兵衛という豪商があった。江戸の堀留にも支店があり、尾張藩や岩村藩にも御用金を勤めていた。その関係から西浦屋の当主熊谷吉兵衛（東洲）は、沢井市郎兵衛とも親密であって、秀造の姉の順子は、吉兵衛の長男宗太郎の妻となった。宗太郎は横浜開港後はじめ本町に、後に堺町に美濃屋という店を開いて専ら茶の貿易に従事した。また一方では質屋をも営んだようである。秀造はもとから胸を病んでいたの
で、美濃屋にあって外人の医師の治療を受け、また慶応二年には江戸に赴いて、藩医である早矢仕有的の薬研堀の

宅に滞在して療養した。有的との関係は、この時からはじまる。当時秀造は洋服を着用していたので、付近の人々は外人と見誤って驚いたという逸話がある。

しかも維新の変革のために、すべての情勢は一変した。幕府の親藩として、殊に藩主が陸軍奉行の要職にあった松平氏としては、その変化に即応することは至難であった。そして多くの藩がそうであったように、藩論が時勢のままに勤王に転回すると共に、それまでの責任を負わせられて、沢井市郎兵衛は、家老の職を免ぜられた。市郎兵衛は気節があつて、潔くこれに甘んじ、江戸を脱走して会津の軍と合し、各地に転戦して、仙台まで落ち延びた。やがて戊辰の戦乱も漸く鎮まつてから、潜^{ひそか}に東京に帰り、罪を赦されてからは、函館判官杉浦氏に従つて北海道に赴いたが、病を得てその地で歿した。変乱の時代とはいいながら数奇な運命の持主であつた。

市郎兵衛が江戸を脱走した時、秀造もこれと行を共にした。しかし白河の柳原口の戦に敗れて、父子は散り散りとなつた。市郎兵衛の手記の「陸奥行記」に

「男惇（秀造）在所相尋ね候得共不相分、道路死骸を心なく心事人にも不言相尋候事」

とある。しかし幸に秀造は命を全とうして横浜に帰り、再び美濃屋の人となつた。あたかもこの時、有的は丸屋創立の際であつたために、秀造は直ちにこれに参加した。薬品の帳面のことは、秀造の主管であつたらしく、そのために有的と議論をすることもしばしばであつたという。ところが不幸にもこの頃から秀造の宿痾は漸く重くなり、相生町の店の奥の間で療養したが、明治三年の八月二十一日に、二十七歳の若さでその生涯を終つた。秀造は丸屋の事業として、洋書洋品輸入業のほかに、なお外国航路の船舶業を經營しようという腹案もあつたという。規模の

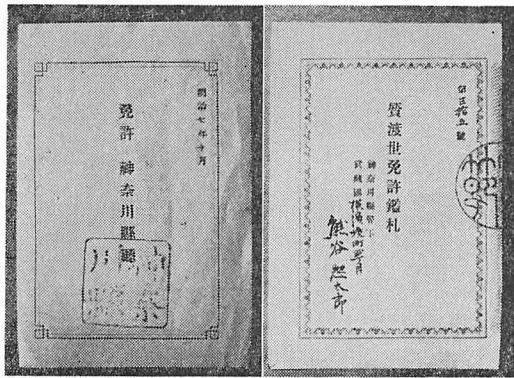
大小は別として、若しこれが実現したならば、或は三菱会社とその先を争うこととなったかも知れない。しかし病魔はこの有為の青年の壮志を、中道にして葬り去ったのである。

なお美濃屋は明治六年に廃業した。そして宗太郎の弟熊谷和吉は、三月に丸屋に入社して店員となった。美濃屋の家屋その他は丸屋がこれを引き受け、一部を帳場とし、他の一部は英学研究会に利用することとなった。ただ明治七年十月付けで、神奈川県庁から熊谷惣（宗）太郎に対して与えた質渡世免許鑑札（第三十五号）が現存してい

る。これから考えると、惣（宗）太郎はこの年にまた質屋の営業を再開したものであろうか。いまは考えることができない。

二 大塚 熊 吉

大塚熊吉は幕府の御家人の出身である。天保十四年（一八四三年）に生れて、有的よりは六歳の年少である。因幡国松平家に出入した呉服商の唐津屋松次郎と幼友達であって、松次郎が病気の時に、熊吉の母はその看護に赴いていた。この時松次郎の治療に当たっていたのが有的であった。そのために熊吉母子は有的と知り合いになり、熊吉の妹が病気になる時は、母と妹と共に有的の家に世話になった。熊吉は慶応三年頃から、紅葉山の幕府の御書物蔵に勤務していたが、間もなく江戸開城とな



質屋鑑札



大塚熊吉

った。この時熊吉は彰義隊に加わって上野に籠ったという説がある。後に平野零児氏がこれを取り上げたフィクションもある。しかしその事實は不明である。ただ脱走軍に従軍するために、栃木まで赴いたことは事實であるが、追いつくことができないで引き返し、ここで生活を一転して、有のと仕事を共にすることとなったのである。

熊吉が丸善創業の際に有的を助けて活動したことは既に述べた通りである。大阪支店が設置されると、熊吉はその主任となった。明治五年に有的は義兄勝四郎の長女お代を、国元から大阪に伴なって、熊吉と結婚させた。こうして熊吉は早矢仕一家の姻戚となった。

明治三十四年に有的が歿すると、熊吉は久しく恩を受けた主人を失なって大いに落胆し、丸善を退いて北千住に居を移して、文具店を開いたが、やがて小石川の同心町に「富美屋」という屋号で、書籍文房具店を開店した。従来縁故によって、中西屋や文房堂の商品を取り次いで販売したものである。同心町の店の裏手には有的の墓のあり多福院があったために、熊吉としては老後を有的の墓守として送りたいというような気持もあったらしい。しかし不幸にも富美屋は事情によって立退きを要求され、一年ばかりで閉店した。そして熊吉は大正十年七十九歳で博多で歿した。熊吉の長子金太郎は久しく大阪の丸善支店に在任し、後に京都支店長を経て福岡支店長に転任している。

三 鬼頭良助、柴田安藏、金沢廉吉、伊村克巳

三次、沢井、大塚の三人に次いで、丸善の創業時代に活躍したのは、鬼頭良助、柴田安藏、斎藤豊八、金沢廉吉、伊村克巳の五人である。この五人は明治三年頃に前後して入社している。鬼頭良助（謙良）は名古屋の出身で、仁菴の弟である。弘化四年（一八四七年）に生れ、早く文久二年から有目的の宅に寄寓していて、いわば有目的に最も縁故の深い一人である。一時水戸に赴いたために、創業の際には参加しなかったが、この頃横浜で有目的に再会して、また事業を共にすることとなった。はじめ静々舎でその調合所の調合方となったが、間もなく日本橋の釘店の島屋に転じた。やがて京都支店が設けられると、その薬店の主任となった。その妻は柴田安藏の娘である。）

柴田安藏は文政三年（一八二〇年）の生れで、創業の人々の中では、最も年長であった。有目的の姻戚となった人物であるが、この人については、本文に記した以外には、資料が甚だ乏しく、伝えることがないのは遺憾である。

明治十九年に大塚熊吉と共に、神田の叢書閣の早矢仕民治の住宅に同居し、同二十一年十月五日に歿した。

金沢廉吉は岩村の藩士金沢林平の長子である。弘化四年（一八四七年）に生れ、もと辰治といい、また弥七郎とあった。十六歳の時に士分に列せられ、洋式の操練を学んで、ことに鼓笛に巧みであったという。この人もまた維新の変革の際に、情勢に感じて早く武士から商業に転ずることを志した。折から同藩の沢井秀造は病んで自ら起らないことを知り、その志を継ぐものとして廉吉の入社を勧めた。廉吉は喜んでこれに応じて丸屋商社に入社したが、その時には既に秀造は亡き人であった。運命は不思議なものである。



金 沢 廉 吉

しかし廉吉は入社してから頗るその才幹を發揮したために、挙げられて支配人となり、會計から応接のことすべてを司り、十年一日の如く努力し、社の内外から絶大の信任を受けた。また一方では社中の少年たちに夜になってから読書・算数を教え、歴史物語を語って、倦むところを知らなかったという。しかしこの人も不幸にして多病であった。さきに脚気を病み後に胸を患った。一旦小康を得たが、再発して終に起たなかった。明治十五年臘月のことである。沢井秀造の夭折と共に、丸善に取って、まことに惜しむべきことであった。



伊 村 克 巳

伊村克巳は、金沢廉吉と同じく岩村の出身で、天保十四年に生れた。明治五年に丸善に入社し、店名を新一といい、明治八年に東京売場の帳面方となった。中西屋が開業すると、その経営の主任となった。明治二十九年四月に歿した。その養子金之助(旧姓野呂)は父の關係によって、年少の頃から久しく中西屋に勤務し、父の歿後その後任となり、大正九年に中西屋が丸善に合併して、その神田支店になると、金之助はその支店長となり、昭和十年十一月に歿している。

四 物故者の追薦会

大正八年三月二十二日、丸善はその創立五十周年を記念して、創業に最も功勞のあつた六人の物故した先輩の追薦會を、本郷駒込の吉祥寺に営んだ。この時に追薦されたのは、早矢仕有的をはじめとして、三次半七、伊村克巳、齋藤豊八、金沢廉吉、及び有的の後を承けた社長の松下鉄三郎である。沢井秀造が省かれたのは、恐らく在社の年月が短かつたためであらう。會に臨んだ山崎信興社長の追薦文の一節にいう。

(早矢仕) 先生ノ我社ヲ経記スルヤ、販売ニ簿書ニ執務ニ、事毎ニ範ヲ外国ニ學ビ、就中從業者ノ養成及ビ待遇ニ心ヲ効シ、對等相輔自奮自助ノ氣風ヲ注入シテ、從來商家ノ因襲ヲ更メタルモノ多シ。我社社員ガ躬行實踐儉素自ラ勵ミ責任ヲ以テ心トシ平等ヲ以テ相待ツノ社風ヲ作りシハ実ニ先生ノ薰沐ニ由ル。金沢氏以下ノ四君ハ我社ノ創業ニ方リテ先生ノ羽翼トナツテ社業ノ基礎ヲ築キタル功勞者ニシテ、四君ノ周到ナル才幹ト誠實ナル努力トガ、先生ヲ助けテ社業ヲ振ヒタル業績ハ挙ゲテ數フ可カラズ。先生ノ多智多才ナルハ、事ニ臨ンデ滾々湧クガ如キモノアリシガ、之ヲ施シテ遺漏ナク、毫末ノ微ニ到ルマデ先生ノ意ノ欲スル如ク社業ヲ經營スルヲ得タルハ、一ニ四君ノ力ニ由ル。例ヘバ四君ハ車ノ四輪ノ如シ。先生ノ動力ガ如何ニ強大ナルモ、四君ノ円滑練熟無クンバ焉ンゾ我社ノ敏活ナル運転ヲ庶幾スルヲ得ンヤ。先生ト四君トハ異体同心ニシテ、我社ノ今日アル、四君ニ負フ所ノモノ頗ル多シ。(中略)今ヤ我社ハ時代ニ順応シテ、社業ノ規模昔日ニ倍蓰スルモノアルハ、一ニ先生及ビ是等諸先輩ノ遺德ニシテ、春風秋雨五十年、之ヲ顧レバ猶昨夢ノ如ク、早矢仕先生ノ靄然親ムベキガ如クシテ、而シテ毅然狎ルベカラザル風丰、松下君ノ謹嚴硬直犯スベカラザル音容、金沢君以下四君ノ老実或ハ真率ナル眉目、模糊トシテ猶眼底ヲ去ラザルノ感アリ(下略)



金 沢 井 吉

この撰文は内田魯庵の筆に成るといふ。情理を尽した名文であつて、朗読した山崎社長が声涙並び下つたと伝えられている。

ここに付け加えて置きたいのは、金沢廉吉の弟たちである。廉吉は不幸にして早く歿したが、やや遅れて丸屋に勤務するようになったその弟たちは、よく兄の志業を嗣いだ。その中で井吉は、明治五年四月に入社して、店員名を万吉といった。兄に似て性質は温厚であつたが、なみなみならぬ気魄を蔵し、ほとんど独学であつたが、

一通り外国語に通じ、後には洋書部の主任として、久しくその輸入に當つた。書物を愛すること甚しく、店員が過まつて取り落しても、不快の色を示したという。また新たにヨーロッパから輸入される文具品などに対して常に注意を払い、その宣伝を怠らなかつた。スタイログラフィック・ペンがはじめて輸入された当時、異常なほどに興味を持ち、その普及に力めた。万年筆という名称は、丸善の店内で、スタイログラフィック・ペンを、万さんペンと呼んだところから起つたという説がある。しかしこれは付会であらう。

金沢井吉は、明治三十三年に取締役となつたが、病氣のために、明治四十一年に辞任した。しかしその後も出社する日が多かつたという。大正年代のはじめから銚子で静養したが、後に房州の北条に移り、ついに居をこの地に定めて、悠々自適し、昭和十三年六月三十日に八十歳の高齡で歿した。この人の丸善に対する貢献については伝えるべきことが多々あるようであるが、資料とすべきものに乏しいのは、遺憾に堪えない。現取締役貿易部長金沢康

雄はその孫に当る。

金沢廉吉の末弟は、その名の通り末吉である。後に廉吉の準養子となった。明治十一年に上京して、横浜の丸善薬店に勤務し、やがて同地の書店に移った。後に一時朝鮮の京城（ソウル）に赴いたこともあるが、兄の引退を承けて取締役となった。昭和十二年に山崎信興の後を襲うて、第六代の社長となったのは、すなわちこの人である。

なお創業期に当って記憶すべき社員としては、明治九年に入社した朝吹英二があり、これに先んじて明治六年に入社した小柳津要人がある。朝吹英二は大分県出身であって、早く福沢諭吉の門下に入り、明治五年には慶応義塾出版部の主任となり、転じて丸善に入社したものである。しかし朝吹は在社すること短かく、明治十一年に退社して三菱商会に入り、後三井に転じて管理部主事となり、三井系諸会社の重役として財界の重鎮となった。従がって単に丸善の社員としてのみ伝えられるべきものではない。また小柳津要人は岡崎の藩士であって、戊辰の戦争の時には、徳川の譜代の武士として、榎本武揚の下に属して、五稜廓に戦ったが、戦乱が収まるに及んで、身を商賈に托するに至ったもので、有目的の股肱となつて、福沢諭吉から士魂商才を以って呼ばれた。実に丸善第三代の社長である。その人物及び事業は、後章において詳らかに語られるであらう。